

農業復活と产业化

「新規就農者に聞く」



相馬信行さん(38歳) 静岡県出身 キグ

●農業経営を始めたきっかけを教えてください

相馬さん：前職12年間サラリーマン。中間管理職の立場になり、自分の努力だけでは認められない時期が来了。悩んだ末、サラリーマンをやめました。「成功も失敗もすべて自身の責任である」仕事を検討する中で、農業経営を考えるようになりました。

久保さん：ブラジルのバイオエタノールが流行った時期があり、その映像をテレビで見ました。日本とは違い、荒れ果てた土地で逆境に負けず、土地を耕して農業をやっていました。その経営者が「金が金を産む」という日本の大経営者よりも格好良かつたんです。

中山さん：諏訪出身です。最初は東京でサラリーマン生活をしてたけど、いつかは諏訪に戻りたいと思つていました。農業系の大学出身もあり、この経験を活かしたいと思いながら仕事を探している最中に、富士見町と出会い、農業を始めるきっかけとなりました。

迎さん：就職当初は情報処理のプログラマーでした。IT技術の発展性がないと見きつた。それからオーストラリアに行き、収穫した野菜や農業者の姿を見て、人間にとつての土台を作つていると感動しました。これからの時代は、もつと農業の需要が増えると思い、農業を始めました。

●相馬さんは農業を始めるにあたり、いくつかの地域を見て回り、最終的に富士見町を選んだと聞いていますが、富士見町を選んだポイントを教えてください。

相馬さん：最初は福井県で就農を考えていたため、就農支援センターに話を聞きに行つたところ、相手方の第一声が「本当に農業をやるの？年収が1／3になるよ」と言われた。心配になり、1年間農業について勉強しようと、原村の農業実践大学校に入学しました。長野県は以前から憧れており、ここで暮らせたらよいと思いました。

農業者の高齢化、担い手不足により農地の荒廃化が懸念される中、新規就農者の参入で富士見町の農業が変わり始めてきました。富士見町の農業の魅力を4人の新規参入者に伺いました。

【はじめに】

富士見町は平成23年から新規就農者を積極的に受け入れる「新規就農バッケージ制度」をスタートさせ、現在33組の農業従事者を支援しています。

ちょうどその時に富士見町と出会い、担当の方から「相馬さんみたいな人を待つてたんだよ。富士見町で一緒に農業をやりました」と衝撃的な言葉をいただき、これが1番のポイントです。就農相談を通して農業で生活していく数字的なビジョンが見えました。町からのバックアップも大きく、これら生活していくと確信できました。

●迎さんは現在、独立に向けて農家で研修ですが、農業研修を通じて感じた富士見町の農業の魅力を教えてください

迎さん：農業に限らず、富士見町の人の良さが1番の魅力です。知らない人でも「研修生ですか？この土地空いてるよ」とか「道具は大丈夫ですか？」など、親身になつて声をかけてくれます。

●久保さんはレタス栽培で経営を始めています。レタスは相当な規模の農地を確保しなければ安定した生産ができませんが、どのようにして農地を確保しているのでしょうか？

久保さん：初年度は研修していた農業生産法人から農地を借り受けっていました。今は農協に常に話を持ちかけていますが、いろいろな方の利用割り振りがあり、タイミングが合えば多く紹介してもらえる時もありますが、待ち状態の時もあります。その他産物の生産者の方にも顔を覚えてもらいながら、話を持ちかけています。また、地元区に加入できたことで消防団にも入れました。このことによつて若い方を中心に地元の方とのコミュニケーションが取れるようになりました。やつと今年になつて、農地の話ができるようになつてきました。

●中山さんはイチゴ栽培で経営を始めたようですが、富士見町でイチゴ栽培をするメリットを教えてください。

中山さん：富士見町でイチゴ栽培をするメリットは、大きく3つあります。まず、1番大切なことは「気候」ですね。高冷地であるための涼しさが重要です。夏秋イチゴは30度以上になる所では栽培できません。2つ目は「水」ですね。本当にイチゴは繊細で、富士見町はきれいな湧水に恵まれ、八ヶ岳からの伏流水が使用できます。3つ目は「立地」です。夏秋イチゴの栽培は北海道や東北地方を中心で、例えば九州地方に出荷する場合など、首都圏に近い富士見町の方が早く到着します。新鮮な状態でお届けできます。

●高冷地、日照、水、立地の条件が良いことがイチゴ栽培に向いている。これは花きや高原野菜が産地化された理由と同じですね。条件の良いところで生産することは安定した経営をするためには必要なことです。やはりもう一工夫して農業経営をしなければ所得アップにつながらない。相馬さんはキク生産に新しいビジョンを持つていると聞いています。どのような内容でしょうか？

相馬さん：農業は「ばくち」と言う人がいるけれど、そんなことはありません。僕には、農業で確実に経営できるという信念があります。数字で突き詰めて予算を立てて、今年悪かったところは来年直していく、「農業を産業としていかに継続していくか」これこそが最も大事なポイントです。

キクについては家族経営があつて品目だと思う。それを全く否定するつもりはないが、これからを考えた場合、この経営形態では産地維持が難しいと思っています。この場合、法人化も見据えた「人を雇つてある程度の規模の経営」を考えていく必要があると思います。この地での夏秋期のキクは、高冷地で首都圏にも近く、日本一の品質を有しています。気候、立地条件に優れた素晴らしい産地です。



久保芳一さん(30歳) 愛知県出身 レタス



中山陽介さん(30歳) 下諏訪町出身 イチゴ



迎 弘樹さん(32歳) 東京都出身 キウ

僕は自分の経営だけが成功するのではなく、産地としての維持・向上が大事だと考えています。生産者も減り、需要の大幅な伸びもない中で、他産地と競争ばかりせずに手を組んで販売戦略を練ることも大事だと思います。

●久保さんは、独立後1年目からレタスの売り上げが多かつたと聞いています。農業後継者が少ない1番の要因は農業が儲からないと言われるからですが、利益を生む農業のポイントを教えてください。

久保さん：自分たちは研修先も含めて、営業がとつてきた数の出荷の数量と品質を皆で協力して、欠品せずに出そつという形態です。

他の人が出せないと横のつながりで他の農家さんが助けるんです。労力を惜しまず、あくまでもグレープで動いています。

また、今でも研修していた当時の仲間同士がつながっていて、間に合わないときは応援に来てくれるし、こちらも駆け付けます。道具の貸し借りも行っています。損得が常に横でつながっているんです。さらに、規模拡大しても、ある程度同じ雇用と機械ができる自信があります。独立1年目から最初に用意できることの上限から、いつきにいつています。

●これから先の富士見町を考えると農業を産業にしていかなければならぬと思います。農業経営で利益を生み、規模拡大して多くの雇用を生むことで富士見町に生活したいと考える人も増える。農業の産業化は人口減少対策にもなり得ると考えます。

また、生産ボテンシャルの高い富士見町で農業経営をすることは、メリットが多いと考えます。皆さん是今後、どのような農業経営をしていくかと考えているか、教えてください。

相馬さん：農業を産業にしていかなければならぬという考えは、非常に感銘を受け、同様です。

今、町が支援している農業者は関係者のご協力により順調に、そして確実に定着し、地域農業に貢献し始めました。

(聞き手：産業課 営農推進係 植松)

感しています。新しく農業を行うにあたって漠然などと「笑顔の循環」だと思います。

自分も笑って生活できる。周りの農家さんも、そしてキクを買ってくれる人も笑顔でお金を払ってくれる。それが1番重要な方針です。それを満たすための僕の具体的な方針は、経営を数値・データで突き詰めて、「お客様がほしいものを生産者もお客様も満足する値段で買ってもらう」ということです。

家族経営の形態から雇用経営に踏み出し、地域の力を取り戻し、農業の地盤を盛り上げていきたいです。

●久保さん：「農業はマンパワー」であり、人ととのつながりです。今後も正規雇用の方へ、きちんと給料を払える経営をしたいと思います。研修中に介護の資格を取ったので、いずれは冬場の仕事もできるよう介護施設を建設したいと考えています。

中山さん：自指したいのは「富士見町のイチゴのブランド化」です。夏場の果実など、隠れた特産品が富士見町にはたくさんあります。「夏秋イチゴの富士見町」から発信して、いずれは「夏場の果実の富士見町」のブランド化になる、よい波及ができるような農業経営をしていきたいと思っています。

迎さん：まずは独立することですね。そして、しっかりと利益を出す。それが地域の方に對しての恩返しとなります。今後、将来的に地域の方をたくさん雇用できるような経営を目指し、他の産業の人たちと手を取り合っていくたいと思います。